関ヶ原軍記

三編九

十

特へ遠13
2207
35

凡士農工商とも夫々の職分家業を固て相用の器物を造り
今日を営む事世界一般に然り然るに近世写本の巻中に卿ら白象
の書に種々の書入又は秘さへ賞玩すべき木偶人或は見苦き
男女の陰部を画き君臣父子の中に至て甚敷合事
間く多し是畢竟一時の興に乗じての戯るるうんら俳
其職分に道異へ疵付るに至り著述の筆者の誤り
のみも思言語を以て其過ちを免れ難く国の風俗を紊し
池田屋常吉是を歎て終に文源を国て素代て諸君子に訴ふるの爾

和漢 貸本所 東京牛込細工町 誠光堂 池田屋清吉

廣石山人識

門へ遠13
帙2207
巻35

牛込 本 池清

関ヶ原軍記三篇巻之九

目録

一 鴻津勝 杉平下野守度の勢と戰ふる事

一 井伊直政殺・来る事

一 忠吉・井伊 鴻沢三郎左衛門を討死事

英鴻津勢揚軍法籠城之事迫

牛込 池清

帝國圖書館藏

関ヶ原軍記三編巻之九

鴻津中務太輔　松平下野守度の
勢と戰ふ事
并井伊直政　忠吉公城殺ふ事

曰く鴻津義弘頼りに無城をあ
て防戦和戦押破らんと欲ス
郡松平下野守度武勇をふる

れ松浦三府と称と稱頁方て
貴ものと時井伊直政
又て鴻津家久と和戰
出帝　内府公と佐籠本
勢三分一ハ以く鴻津の勢
防ぎ強る変ず　柳原或郎
右衛一人　秀忠ハ
出先く来り合せ
和戰と
実東勢ハ
強西方と切
利と加り
鴻津義弘ハ関ケ原ハ戰
を近来武つの
処ありこれ武勇ハ
陣く其家久
御下知ハ依て
稱賞と
御勝

して教代武雪は名代家
さだ五百年来相續せこれ
全くい武徒だうりみもの
らば幸ひ年を回遠く
遠古代頃をすりさいの戎
人いつを後れば時津い武雪
そ毎しくのごくな
うんと時津が所国をもつて

つくりたるこれ
考不審なるい大概を又我
内より東海道東山及何
も名れる智謀の良士なり
後りさいく考又大体を又我
内より此まいづる後年
薩摩大隅日向おの国より
いでくる事いかばかりこれを

国大ひ手備こうして出るとい
ふ手りして弟を窺ひ
又子の方よりせうんとまれ
ども淡海軍に備てうり
鴻津又大軍あれば小野を
もつて攻る事叶はず大
軍の時を以て兵粮運
送の手不自由なり是

古国攻の時も如何を
手攻討人をつかく
永久他を伺ひし事も
苦くるゆえ手人を撫
じて他の者を入れば国遠
東在中毛のうを知らず
して兵風を国会あるく
奏ぐ地形百姓を不易の

國中見而又法藏師遠近名人
の出る事を聞て師匠の
筆之他西の人車と賢の故
名人の出る事も亦きき等る
所なり人を西辺境に居りて
入来る所に師匠なしの
も形名人智識学者の

人数欠くれば出ざるの
利之起西之金花の錢を
足る時は下西にて去る
も山酒さうんみて山家に
國あり兵庫斗りなれば
いつとも二ケ西を不易る
所なり代軍古来より
迷惑後手い立ざる國と所

捨置の後又世上の害
と成て外國へも出ぬ様
変事出しこと家ケ原の戦ひ
より何とも亮意の者のこ
とく鴻津家なる事を
知りて他家なる事と知ら
ぬ京大野の中にて健なる
者斗りと撰こ来る有形の
ごとくこの程なりとも
合戦ありて左もなるべき
なり強れ共薩ケ者よ
うぐり別して強き面あり
又奥州の古来より武
勇もあつくこころも猛
次に小西又郎のごとく此
程強き薩州人のこころも

限るまでされば天の御無まへ
[illegible]と[illegible]花の[illegible]なりし
畿内中央東海東山北
天地の運運順して國の
中央より東西を國の堺ふ
して一方い海代を更く片張
一方い日月とうけ昼中年
あるべし西のいるさい夕日

輝く所にして人生れ
るべく実初程使して
万八千日ひらくるの来い
陽事ふして朝日は強気を
用ゆる者心百八つるるく
手強しして小国を日本遠く
して意思ひ張く人の
世なるべし片なる張て

生本人正直ならんば故
年学文智徳の人きいで
ざるなり又畿内中西東
海東山とも小國の中央よ
りて天地陰陽和合性正
して只白紙のごとく生生
を稟れば紙といへど其白紙
も物手清安く赤くも

黒くも自手加るよりて
学びする時は紙墨名人も
稽古するのゆえ武勇も又其れ
ごとくされば名将も出る
なり又清安き人悪人も
時は学ばざれば悪人なる
悪人も生まれつき有徳人も
大悪人のあるも此國なり

東西南北小の果ねせば行つる
まて毒一箭まして又五つ
く悪人も出ぬの理なり
後の時は此理を変て生れ出
ていま彼の時に白紙の
如くなれば何をも染る
事なり孩子なる幼稚
此時より急て教くに教

よい悪くば名利を始るゆへ
是悪の境なり
去程に鴻津兵庫頭義弘を根
メ丹波が討死を見て大ひに
いかり憤りて今日此戦ひ
に敵の一人討死せざるものなる
べきや我も人を討死せんと
るりめんくも蔵ヲ

より出百里は海陸城軍をべき
為に来りしるしぞや又若年は
秀頼公に軍勢をれるい武つの
義をり家康徳の軍勢を敵
手を立る事必地に後く
ら

徳川家と一揆頂を
御本陣と見寄を押出さる

武陣を鴻津中勢を備并びに
松浦三府を防組合せ籠本
城押合せ二段四千騎陣の
声を揚に押寄る
石田三成二度に二度は
逆纏の張本をれむて
功名手を尽を法大将を
抜に石田手向の清津

佐竹義宣ひきゐる田中金吾
殺軍は後を和友とする所ゲ兵一隊
の兵船命を勝まじ和働らく
俗し此佐竹義宣は浦津勝の義
本へ寄るべきものとなりこの賞
島松平下野守忠吉ひきまぶ
時分年五十五矢を以利義
なりて知る武勇の大将なり

此時浦津勝の弘来りを見ひ
くまりや軍大変なり俗
地頭とはべきを戦ひぞやとする
を矢おさるれば手勝二子金時
時るべく鴻沢義清ありく
年一面立より間ひこの戦
よく横合切立強さ敵を
ちくく突破らんと押寄

鴻津中務大輔殿百余人
にて接連なく御戦ひ致る事
鴻津勢の太刀さき鋭くして
下野守度の軍勢数多震ひ
らひ太下総守加く戦ひ急
なく足へよけるを又鴻津勢
より籠城をなして地向りを後て
下野守度の後へ廻りゆく

もなくうし処へ急く鴻方
戦ひよりを対何方とも
弱き方を助け殺ふ度ゆ
井伊直政公ひ居ける事
今下野守度の戦ひ急なるを
足く会郷中浦を一ツ余人
太吉ものを殺れと先陣を本候
太後 度平助太うつ 四石主水

を始めとして烈風のごとくに
攻かけ樂の真中へ寄て入り大砲
を散らして攻戰ひ家久ぐ
軍勢不さんぐに成んと
思ふの時高津中務右衛門自身
殿を乞ひ真先手をみれば
ひふ以一戰を安吉のいくさ物り

国を初る時より兼て家胡い極め
より今この時く討死せしも士
卒とをげまり命ぶ殿を
のりく却奥立くれ働く
薩ヶ者い元素皆達者る
達人元陣ものいあ
て相ひ手ひ切く働く
といへ共右の方より井伊直政ぐ

一千余人おゐ働くべき
ものもいうもなくして既に敗北
きの所に大将義弘の前押
分くべきとて二百挺の鉄砲を
ある二百挺の鉄砲を
打立る此砲先へ出くしく
思ひ合の間敷野打立る大きふ
敵敗して敗軍并伊東政
雑人たちも引くくてゐる
敗北の前松浦二郎左衛門軍
将ゑ薩摩野郎二郎三百余人おちち
刀と抜連て一ちうせんせ
雄叫の声を揚て打入り候
あ下野守度のいる所へ再ひふ
新平太も大きふ踏ぶ立向方へ
そい退たらんれ

忠吉々井伊　彦根城主三孫左

松浦三郎兵衛尉

兼浦津兵部弘掃軍出船ゑ（乗）迎ふ

和尤此郎松平下野守忠吉々

出羽年代大将ゑ武勇代沙

汰ゑ人馬ゑ一人馬ゑ刀振き

ゑ出ゑ海ゑ主人

地持ゑ何方へ逃退ぐゑ

返せゑと郎ゑ大将

と見てゑ松浦三郎兵衛ゑ

大力の名ゑ新へ弘来り

出後ゑ出撓ゑ

上地一方刀深く切ぬんぐれば

掃ゑ血ゑ潮のごゑ忠吉々

ゑ少ゑ忘れゑ

もとより大雪降り兵庫の軍有全く
此古名ちんば九郎義経中ごろ叶
ひ難きはじきは有板ありて井
伊直政と号せし武士彼や
九郎義経と一戦す敗
走り松浦と戦ひ敗るに三所
合戦を以て曽士なるべかしし
も退ぞく故後たんと働きて

古刀此法かしを以て討
を敵軍の内に強き人を
知る者形くに働来る処よ
浦津中務太輔を見て何
さまを松浦に働くゆう兵
そい大将と見へきり殺ひて
南の敵に対も〳〵きこの
所へ寄来り井伊直政の眉先

へ切めんぞり重政を知るゝ
と刎を揺りて向ふゝゝを
又右の縁へ切めんぞり重政を
既に二ケ所を負ひ流るゝ血い
潮のごゝく又紅ひの糸威郎
とるがごゝく出ん重政を
武勇比類人ゝして強く壮年
なれども如何ん勢ふ

問て曰く浦中勝い松浦を掠奪
せんとせべしと知りつゝ
と弱生して強くもそりもや
丸吉ゝとの四丈斗り備ゝり
りゝの義李浦三所を乗ゝ
忠吉ゝの るゝ右ゝ迄りて横合
を引張んぞり下地もどのも
鑓放ゝ出る薙刀と

捨てひるまんとせし合の戸
松浦の家の雪無るに馬より
組落して太吉郎を押へ
既に首を討んとする処よ
太吉郎ちこ所を来り右の猟師
駆よりくるるを時
せり合の内に指子と吉政ちち
と見るく下野ちる度急ぎ来へ

家久子の内にいる吹ち屋へ
兵今立人此公年歌と組討の勝
負実年之来ぶ子手へ和勢
いるる事ハ暫くく見ー猟
いもうこの猟負の後年を
又来り家親の屋ー某ハ
井伊直政ちりと名乗り家
久を元来一筋子 律義太郎の

人形りくんば他人の恩義をも
感じて兼て井伊をば恨び及び
し在神妙を以ども何ざるも
此度政を討られし迚も其のを
の助けなもし如何なるとおりひ
如何なる場所の実説の先条を述べ
きことて味方に成陣に入り
り此時直政も雷光のごく

彼方へ急ぎくるより発下り
松浦が在所の後地を掘り
紀さんと出るうちに心早くも
在方を差添を按く松浦が
差を討んとせらるる時直政は
大勢を自分を討ざるが故実之
きいの時に清沢官兵衛
来りて松浦が首を討時之命

弓矢いはと雨降て時沢ゞ左
の手代橋二本陰切り落ち
宮邸く隠れんでいけるのもも
ゐる事なり信濃せり時津
黄瓜を縛りて井伊ゞ同
野と退ひ武千隊人猪岡
城上く院手隊本へつき
うける　内府二頭り

手　御下知有て内藤本二分
一大書紙　毒薬組折合せ二手隊
人数と立合鉄砲を入れて挑み
戦ふ此義小の方山男れ道節
より義手と見へ軍兵二手
斗りの疲る中烈風のごとく
声を発して強き事偏ふ
なるきの盤を有るゞざと

歌も集方もいろ加勢ぞと危
ぶむ中みな実来勢い多あれ
ど歌ろうべ〜と
ぬんぬん手に汗を握る斗り
なり夜も明ると歌味方とも
能く生死変の打ちあれば
雑き人籠の紋を見知るもの
多くなる時侯書添辺まで次第

急ぎ見届けに成り帰りて
御前に出でて言上まかり籠い
雑地に斤猪車に紋ちあれば
柳原ど同勢ありそれと中上る
れるまつく法人も廉政ぞ
知り合り見ども紋き景
年来りて扨又
東照宮様御名将といひ

御智謀ありて敵合のとき
うひい御名人にてその名聞
等いはぬものなし
りうの軍勢もうぶんなり
御負軍おいてれるを事
いとたたうひの景色いまゝ
まんじまんむづうく
まづかれいうまを勝べき

ありさま好りう

池清

池清

池清

関ヶ原軍記三編巻之拾

目録

一 石田方より西方物忠敗軍に依て
戦顕はす事
并鴻津家の新潟武蔵守討死の事
一 鴻津兄弟問答の事
并鴻津中務兄兵庫頭に別れ

事

池清

関ケ原軍記二篇巻之拾

西国勢惣敗軍より成る事

并鳴津家の新御武義を討

死の事

去程に小柳原或は右柳も

秀忠公乃出先手也しかるに

一備へ[illegible]れ[illegible]上四御屋より

来りしに大概を書記るより
先手の面々横合の場つ 御足九郎
兵衛 紫田七九郎 御家子一
兵衛 仔度九兵衛等とせめ
よせて多勢百余人鯨波の声
を揚ふく兵船をいそぎ横合ふ
組入きり 陶右衛公是城
御後じて大ひよう御横場ふく

床机を立てるなんひ此七つ
御箱本半を第一もひて第
のものども弓捕手の大手場
利るるぞと思ふと御立ちより
有て 御下知をこの時大番組
安東孫兵衛尉ふ三ふ人百余
人孫兵衛波を揚ふく打ふ寄る
されば御箱本ふ惣名り見

右戦たるより後く惣軍
かち関城揚く池田福島寄
田細川加藤堂藤堂山
内京極金森中村朽木脇
坂秋月おのゝび南京山の
押への勢も一同に拾万余人
揚寄せと揚く家先より敵を
切崩せるの時より淀田小

勢石田おも今の大崩より加
て敗軍既に小実村の柵の内へ
人なだれを寄て南京山伊吹
山のあなたも敗軍せるの時
浅津義弘大敵を支あぐ
せるも色屋きば天を仰ひ
で歎息
御運命も天の助るおるり
内府公の

今さいふあるゆへ又作法
御事ても勝利ふかるべふ
さいでく実説のいふき城
まべきまるりそ兵今御籠本
ふて籠を合ふといふ大軍勢
城あつむるて打破と思ひ
ふ大ふ敵を打負り強ふ薩
ケものい能く法令をまるゆ名

一所て籠城目市しに組集まる
軍勢不意竟の者共武千四百
人このせい薩摩 大友おい加友
左馬亮に取迎あらんく防ば
ふちしふふ様て義弘ふ
大きて怒り取くき軍
して討死ふべしとて軍勢
を二組て分け防勢二ふ人百

人数一手に新田武蔵守二人大友
宗麟中務大輔の義弘の籠本
城を二手に分けて攻寄せ
る鉄砲数百挺手二人の所
を射くずし敵を突くず敵
より新手諸方の寄手勢も
諸所籠城を攻つけ事
お集り来る者一も新手ぞ

柳原武蔵太輔康政を新田武
蔵守手に付て攻寄せる此次手
る度毎度攻合を攻めも
して佐竹勢岡の城を揚て
退城さんと欲す新田武
蔵守は四方八方の敵を見て
行方知ずして寄手勢之
今は日本国中の軍勢とても

あつまれり一方い薩手勢を
防ぐべしとて又十挺の鉄砲にて
打立る柳原康政下知して
死人を捕よせて相手をもと
きさせて馬をめしに此馬
狗先を打掖れて倒されまつ
第四七九番地第りて馬より落
ちりこのるを奇なりといふ時

て康政大ひにいかりてまれ
年老たりといへども侮らるべ
命拾せらるべきやうなれば
むひあり急ぎ敵向ひく
討死せんと廟まされて柳原
云ふ我先と馳合せ戦闘
武蔵ちが軍勢云ふくなる
也たらひとをぢめ者り

その後より下野守度重つけ
給ひしかや康政家を二の
目なり先陣を大ねるくて
い歩行なりこの馬に乗べし
とて長柄なりをひて引
分ての康政をそれを見て有
難しとは見へ共事急なれば
仕覚といふくおのり戦ひ

をいでむ彩酒を十方ふ南り
陣手手代のたい今新より
代戦ひ手代くく法所手
討きくく今わくや湖くふ振
陣斗りに敵りおりり付せつ
武藤さい軍仕を沼くを人に
りも送るやう事るわ呂今
討死仕る也君を急ぎこの所

城切掘ケて本丸へ突きゐ
ちらせ突殺又掘籠の高サ
九尺程にて柳原が陣平家へ
とりこの前ハ右ハ
籠を立切くさりたる
ものの康政へ
乗ねといへ雲気つゝ
して籠城と見せ
引組んとり武蔵守ハ
雲ねして孫手年寄りた
者有行の遣俳もるく康政
城立て押へ首ハ切とせ
ゝゝろへ柳原が家人伊東右
兵衛組来りて組たるを
さつゝねる紫面陸見原面
等同じく突来りて又左右より
利貫くもろ共の形消も

終年以来討死きり武辺
大ひしりて家敵を勝負
きるに皆焼げと成て夢
て討死する首を何ほせん拾
よと下知する人和尚首
捨あり去れ家人のうち
して拾ひ出せ切武者ぐ
弥兵衛きいきと一丈も

きりぞうして討
死を遂ける勝津ぐ武雪ひうる
れ

勝津兄弟冥官の
并勝津家久兄会庫改を扇
まる中

回く徳方北戦ひ冥東方勝利

て孤城をかこみ
敗軍の時に鴻津が軍兵も大
概討死して今
はいまや逃るべき
もなくなりぬ此時中務大輔家久
一人後の勢を引とり止まる鴻
津兵庫も海辺城へ引退く
兵庫は捨て実家が
此士卒共を引くし鴻津

中務大輔はこの時はづの小勢
をもつて海辺城立切実家此城
軍勢と相戦うとい(たつ)て
うち死をし此時関東方に勝利を
今揮を名あらぬ中の
刻ひかれ惣出陣利なり
鴻津義弘を勢州殿下籠
城して大津より大坂へ

て本国に帰り体一にして
儒者の曰く君として臣
を使ふ礼をもつて
又臣君に仕ふる忠を以
て主を事ふるもいまだ
忠ならざるなり君と臣と
相与に礼なるべきこと
是の如くなるべしその

事をなすと云ふ事なりまたい
かゝる下にいたるまで君
又臣下に仕へざる器なり
又臣下君に仕ふる事
を好まんで功業を好まず
愚事に隔んでいまだ
其元を知らず大切なるいのちを
以て捨てるの者の事
平生心にかけて何とて

常ゝおしへ仕して
加増褒賞城屋ちんや主
人の家を見届けんとい
ふ大ゝ子ゝ有りこれ士農工
商ゝ限ゝ べゝ ゝ ゝ 只 人
又ゝ新ゝ 加 ゝ 改むる事
例を委ねる 級 一ゝ
この後ゝ 只 ゝ 時 家久の差

恨ゝ ゝ 今ゝのせゝ ゝ
ゝ 討 ゝ ゝ 右 ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
吉野ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
村ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ 家久ゝ 和図
此ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
武勇ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

智賀爲彼の家久之今に
あるてい中務代々鴻
津ゞ子孫也忠ゝて家
解とつゞ實子ゝれ他家
へきりてあるひい近習ゝ
おつゝえ其一党と
して今ゝ同じゝあり
そゝゝのゝゝびお体仕る

るゝの家党ゝ
討死して中臓地あゝい
せり

那ゝ實ケ原ゝ余ほゞの
大軍ゝ闘戦今い早高見
ゝ加りゝ實ゝ東の徒軍勢
勝岡ゝ揚石田小西 宇田木の
四万余人も頭ひい討死ゝ又い

手負て打ちし軍兵共も
こゝに悉く人数をれを家て
行吹山の方へ敗軍はさきれば小
池むら小関村の柵場の前後い
元人の山城築しゝ時津義弘
の兵一陣も一寸も退ぞくして
打戦ふ内に新納武蔵守
討死をその弟蔵池大友主殿

始めゝして元尼寺の所ゝ此者
共も結而討死して今新迫
八千代軍兵共も荒方討死して
今はゆ
ゆと中務殿兵衛殿ばかりゝく
年ゝと堅固なりて打戦ふ時
手家久公と本陣へ寄合て
自人兵庫殿へ

戰も今いくばくぞ敵は
討死せんず迚この勢軍の場
にてはべるべきうれあれば今
前後を見はるかす級軍は味方も
こぐ〳〵南の山深く引
退ぐく南手に吹ば此級軍
は同じ事なれば敵よ
金吾中納言秀秋はせ免

朽木 秋月 脇坂 京極等は軍
勢に弱ものうち兵を
いそがるのあるべきを却ぞり
海道の方に退くとも討ぶ
せるとも出べきなりと動むる
ふるうく兵庫頭も尤の支
ありさまに打破んと薩摩
殿帝三百余人を先手として

西南の方へ級ぐく
きりに鴻津に弱わりうるおむる
つく手勢五百余人鬨の声を
揚て金吾殿のそなへ城打破る
秀秋もこらへい雪あれども
今朝より敵大谷と戦ひ
つれ武者とるりてゐせぐ
殿も見悟もなく大きゐ狼狽

走りあげ走く麓く布陣津
を牧田源左衛門尉と
堀のそなへ也と成
城考ひく考ぐ休息成
ゐりゐり後る手に中務を補家人
を叔父の中務を補ゲ出ゐと加
て手家督をつぎ一家ゐて
五百石の知りを附く大武雪

此人あり実を鴻津龍伯の
三男尚今の鴻津左衛門舎弟
なり當年四十又は過て盛ん
第人あり和歌ひこ一歩ゝくみ
なりて志げうの歌の板子を
嶺ひ百首をして出海道を野州
荒地へ出さ足り大坂へ志り
ぐ紀州へ来名の槇竜山水口ふ

るびてこれて見る味方此地ふ
きで歌とても志くこゝろの安
又大坂へ和強り志士地集
く大坂を引ちひのへ先生
び行より歌名を退蕗へきるり
を手寄る中勢この所へ
ふゝとぐ情りて討死をべきを之
味方いを頁ふく古途の働き

故り親兵者共を引ばゆるとゞ
まるべきなり今其こゝの所へ
出ばゆるひ百百人軍会退転
来るとも此方より先へい一才も
動せずこゝろこゝろ
ゆきく退来給へ叔本忠へ伺り
なるべく時節を待く運ばこゝろ
こゝろ来れ妻子をば海へよ

此那ひ中こゝろいつ時平三庫
次義経きこんを法くゞくと安
く大ひ平怒りいつ中勢怪
ふこけこゝろ海ぢ秋を怪病
者と思へ秋武雲弓矢を
い祖こゝかゝ義こ隠んでい
又なんぢこゝ家平及ゞんや
柿本忠を出こゝり遠東山

所に隠れて合戦を乗り生き
て再び帰らんと思て思ひ
弾く清代相傳の人々と大方と
討せて我一人残り
浦第地大方を始めとして
家来たちの
古幸い勾倫
伽藍して楽

より何とか冥加なくべき又橋子い
我子の次男い又七郎三男い海
ぢの親の所そして橋子を生
よ三男い元ねといつ尾を矢
釈を勾りく葉い逃れ
しが中務い討死せ
尾をや上又国を志ど父上を
出家命之を上洛又七郎も

び家督相續のゆい書をひら
ひ給ひも秋元左兵士等を
て討死をば冥途の味方に人種
い墨黒衣で先達て討死
る法士冥途の道をぐる定
りて淋しうべしいでく
追身べきことを強ひ出る級を
くり上髪を拵身るとり墨也

畫地を拵
ありこれ列ち家人への礼なり
とは此時家久を大吉の者く
勢士や運の拵の大將の武
丸軍に血迷ひを出る
とゐねぞやむ判官義經
の身代りを吉野に拵て佐藤
四郎兵衛清忠經一人踏止り敵

を防ぎて大将義経を討たんと
企てし義経の舟手いかばかりなる
強津家を右大将頼朝より入百
余騎にて攻寄る者
は何卒山家解と出相続をなべき
相手おのおのそれのごとくい
中なれ自然乃ち為に討死するい
ほとりて降りしかばかりを

今代ごとに宮方を組し厳
手い郷援けてこの大敵の寄せ
くきを人を切掛け本国を降り
おらんもを知元形くに石
此家久手離る事をいやがり
くもとくよ来り武勇や義
ひ降つ中を大きを舟しも厳中
ようこれいを人乃心手いかりを

殺させたるなり又義弘も孔明伝実は遠藤
形わせりとれ共長を仕るなり
といふ事なり　池清

実ケ原軍記二編老の十終　池清

大岡政談　天一坊一代記　前后　四十　大尾
大岡政談　村井實録　前后　五十　大尾
大岡政談　遠見録　二十
開明小説　前田先生編　高橋阿傳實録　五十
近世新説　上野戰爭實録　廿五
両國復讐　女武勇傳　四十
通俗軍書小説　繪入讀本
人情本寫本実録其外書籍
新古書　拙作　真　販賣仕候

三考誠忠　義士夜討實録　廿六
誠忠　義士銘々傳　百二十　大尾
前田先生編　復讐深山櫻　四十六　大尾
漆崎延房編　繪本難波戰記　全十五
誠忠　柳亭種彦編　義士銘々畫傳　編

一　古本類何品ニよらず出不用ニ成ル品ハ直ニ拙方ニ申請ハ可申候ハ多ク御用ニ仕候ハ幸願ハ仮
一　貸本ニ義ハ誠ニ書鼠喰ハ紛失ハ夫ニ代金申請ハ可申
仮令ハ一冊ニ尤又貸ニ儀ハ堅ク出来ル一ツ萬一又貸ニ
被来ル別段見掛申受ル此ニ申上ル事ニ以

誠光堂敬白

東京牛込區細工町十六番地
誠光堂　池田屋清吉